

青畝・静塔・草田男比較俳句論

中 島 賢 介

はじめに

本論では、昨年度短期大学紀要に掲載された中村草田男の基督教俳句に加え、阿波野青畝、平畑静塔の句の中で基督教俳句と考えられるものを抜粋した。この三人の基督教俳句を比較検討することで、草田男の句の特徴を明確にしていきたい。

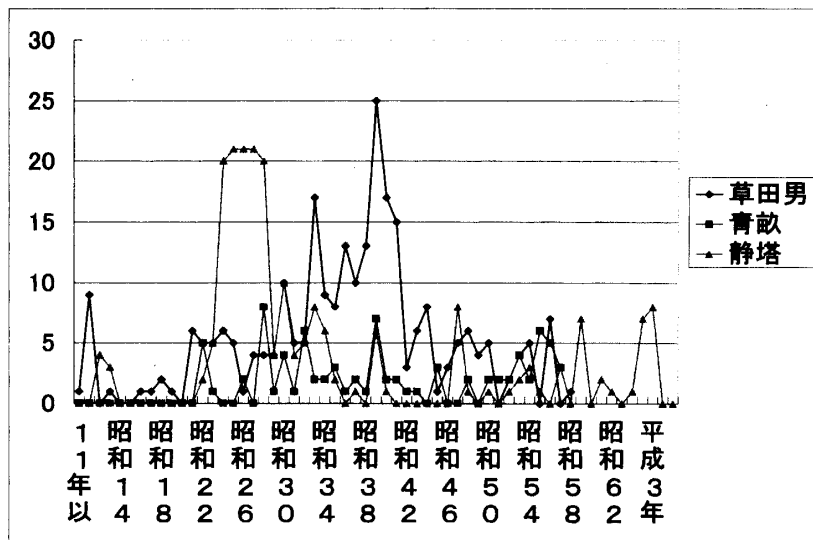
一 比較検討することの意味

青畝、静塔、草田男の三人を取り上げる理由は、まず三人が同世代で虚子亡き後の俳句界を牽引してきたということ、三人ともカトリック信仰に傾倒し信仰歴を持つことによる。(正確に言えば、草田男が信仰歴を持っていたかという点については異論を挟む余地がある。) 青畝は周知の通りホトトギス派の四S(秋桜子、誓子、素十、青畝)の一人としてホトトギス派を支えた。一方静塔は、誓子の薫陶を受けながら新興俳句運動に参加し、根源俳句を詠んだ。更に、草田男はホトトギス派に属しながらも、人間探求派の一人として花鳥諷詠の枠組みを超えて自らの俳境へと到達した。同じ時代に生き、同じ宗教に向き合いながらも、それぞれの姿勢には、保守・革新・中道といった三者三様の生き方があった。このことは特筆すべきことではないだろうか。

二 基督教句の数量的考察

まずは、基督教句の数と句作年代について言及する。

下表は、三人の全ての句から基督教句を抽出し、年代ごとの数をグラフ化したものである。



中 島 賢 介

青畝については、終戦後一九四七年（昭和二十二年）に夙川教会で洗礼を受ける前には、キリスト教句が全くない。彼の略年譜によれば、妻秀が死去した際に「カトリック式の葬儀をはじめて行う」とあり、その体験を契機に受洗する。それ以降句数こそ多くはないが、数年の間隔を置きながらも、生涯キリスト教俳句を詠み続けている。

一方静塔は、戦前より数句ではあるがキリスト教俳句を詠んでいる。京大俳句事件の辛酸を舐めた後、しばらく沈黙を守り、戦後西東三鬼らと再会した後、作句活動をも再開させる。信仰面では、一九五二年（昭和二十七年）に西宮トラピスト修道院にて洗礼を受ける。そのことが、一時期の夥しい数のキリスト教俳句を詠む発端になり、終末であったといえる。彼の略年譜では、「カトリックの洗礼を受け、耶蘇名ルカを得るが、その後離れる」と記されているように、それ以降の句は、時折詠まれるが、以前のような勢いは感じられない。もっとも天狼時代に出版した『月下の俘虜』には、制作年代が不明のまま収録されているため、グラフそのものは正確ではない。だが、その数からして一時期の情熱的な句作として考えられるのではないだろうか。

三 内容の相違

青畝の句は、「踏み絵」「(高山) 右近」「切支丹墓地」といった言葉に象徴されるように、歴史的なアプローチが多く見られる。このことから、彼は自分の信仰を独自のものとせず、通時的な理解に基づき、カトリック信者としてのアイデンティティを切支丹に求めていることが分かる。キリストの磔像についても、多くの日本人カトリック信者がそうであるように、日本人切支丹の迫害と直結しているのである。

静塔の句はどうか。『月下の俘虜』所収のキリスト教俳句は、数は勿論のこと、内容の多様性にも驚かされる。「主ならねど癪と踊りて我汗す」「頑として日焼けてミサの燭守る」「男ざかりの祈りや逃げる油虫」など、静塔自身が情熱的に信仰に浸っている姿を見ることができる。これが、「わがクリスマスグラビアを焚けばすむ」と同一の作者かと思わせるほどその後の句には力がない。更に、晩年には昔慣れ親しんだ聖樹を見て懐旧の情を込めた句を見ると、信仰の世界とは明らかに距離を置いていることが分かる。

おわりに

最後に、全句集から抜粋抽出した青畝と静塔のキリスト教句を挙げておく。こうしてみるだけで、単にキリスト教俳句といっても、多面的な考察が可能であることは十分示唆できたかと思う。今後は、二人の句の内容的考察を深めながら草田男のキリスト教俳句に近づいていきたい。

阿波野青畝キリスト教句

一九一七年（大正六年）～一九三〇年（昭和五年）

なし

一九三一年（昭和六年）三十二歳

処女句集『萬両』刊行

一九三一年（昭和六年）～一九四一年（昭和十六年）

なし

一九四一年（昭和十七年）四十三歳

第二句集『國原』刊行

一九四二年（昭和十七年）～一九四六年（昭和二十一年）

なし

一九四七年（昭和二十二年）四十八歳

カトリック教会にて受洗

ミサの鐘すでに朝寝の巷より

ミサの鐘頓に風花とびまさり

投げし音耳に反りし慈善鍋

馬画き厩めきけりクリスマス

一九四八年（昭和二十三年）四十九歳

磔像のコスモス右往左往かな

一九四九年（昭和二十四年）五十歳

なし

一九五〇年（昭和二十五年）五十一歳

なし

一九五一年（昭和二十六年）五十二歳

ケビンいまカーネーションがびびびびと

この町に墓地を買ひけりクリスマス

一九五二年（昭和二十七年）五十三歳

第三句集『春の鳶』刊行

なし

一九五三年（昭和二十八年）五十四歳

銀河より聞かむエホバのひとりごと

クリスマスカードの加奈陀花の国

聖魔壚はるかなる火の畦焼ける

残壇にちらばる天使春の空

ケロイド無く聖母美し冬薔薇に

磔像の全身春の光あり

萌えはしる鳶御手ひろげたまふ主に

たんぽぽや信者の寝墓ばかりとぞ

中 島 賢 介

一九五四年（昭和二十九年）五十五歳

弥撒ベールをりをりとばし妻涼し

一九五五年（昭和三十年）五十六歳

絵踏など知らずに母となりにけり

十字架を負ひ蜘蛛の囲よ杜若

吹き払ふうすばかげろふ聖書読む

クリスマスケーキ蠟燭の垣をなす

一九五六年（昭和三十一年）五十七歳

アロハ着て安息日の主かな

一九五七年（昭和三十二年）五十八歳

人来らず磔刑イエズス凍てませり

腰架の角ならびたり受難節

ライラック食摂らざりし聖家族

聖夜近くクリーニング屋灯を投げて

聖夜はや紅をおびゆく星得たり

扮したる羊が倒れクリスマス

一九五八年（昭和三十三年）五十九歳

キリストの受難の画ありルオー逝く

被昇天そののちの聖母露に濡れ

一九五九年（昭和三十四年）六十歳

ささやかな集会は耶蘇避暑の町

十字切る十一月となりに

一九六〇年（昭和三十五年）六十一歳

復活の朝のばた屋の空車

復活の午餐のパンのほひあり

銀の箔聖夜の塵に拾ひけり

一九六一年（昭和三十六年）六十二歳

彩窓に日永のサンタマリアかな

一九六二年（昭和三十七年）六十三歳

第四句集『紅葉の賀』刊行

三日月や祷の鐘は天に鳴り

三日月のひかりほそき祷かな

一九六三年（昭和三十八年）六十四歳

一章の聖句を附して日記果つ

一九六四年（昭和三十九年）六十五歳

イースターや一揆の島としも言へじ
イースターのあまくさびとはだれ休み
春潮や切支丹墓地丘を占む
奉教の迫害の丘麦青し
春潮の鏡なしたり天主堂
黙想のしづまる聖堂露台なし
左頬を向くる勇無く息白し

一九六五年（昭和四十年）六十六歳

イースターエッグ立ちしが二度立たず
彼女いまトラピスチヌの菜を洗ふ

一九六六年（昭和四十一年）六十七歳

ロザリオにあやまつ汗は神ぞ知る
白き翳聖母なり水澄めりけり

一九六七年（昭和四十二年）六十八歳

炎天と海とに面し天主堂

一九六八年（昭和四十三年）六十九歳

十字架の姿正しき淑気かな

一九六九年（昭和四十四年）七十歳

なし

一九七〇年（昭和四十五年）七十一歳

磔像と数千万の霜柱
ビラ配るサンタクロース吾に触る
屑入の山羊は飽食慈善鍋

一九七一年（昭和四十六年）七十二歳

なし

一九七二年（昭和四十七年）七十三歳

第五句集『甲子園』刊行
なし

一九七三年（昭和四十八年）七十四歳

紫布の褰ふかく垂れをり四旬節
受苦節や神父のひげは顎に伸び

一九七四年（昭和四十九年）七十五歳

なし

一九七五年（昭和五十年）七十六歳

イースターエッグ彩る漫画かな

中 島 賢 介

主は来ませり主は来ませり燭凍てず

一九七六年（昭和五十一年）七十七歳

明易や枕べに浮くマリア像

背筋まで冷えのぼりくる懺悔台

一九七七年（昭和五十二年）七十八歳

第六句集『旅塵を払ふ』刊行

チボリの灯白夜の悔を説く勿れ

きよしこの夜冬の星座は神のもの

一九七八年（昭和五十三年）七十九歳

一粒の麦を称へむ夏見舞

十字架を象嵌したる天高し

火のごとき林檎ありけりトラピスト

二教会寄りそひ錦なす野かな

一九七九年（昭和五十四年）八十歳

明け方も聖金曜は暗きかな

染玉子画室の卓にのこしけり

イースターエッグ満月を生みにけり

一九八〇年（昭和五十五年）八十一歳

第七句集『不勝簪』刊行

右近忌や小さきメダイ世に遺す

右近忌を興せドチリーナ・キリシタン

聖五月四大不調を忘れけり

西の旅してくたびれず聖五月

地の塩としての島の井澄めりけり

朝虹にはた夕虹に修士佇つ

一九八一年（昭和五十六年）八十二歳

春の雪明るし法王の日本語

日本人磔像となり花下にあり

天主堂干潟に臨み給ひけり

釘がしら沈む神の子復活す

基督に似たる司祭の咳きにけり

一九八二年（昭和五十七年）八十三歳

右近忌の像鳩の糞浴びにけり

アレルヤアレルヤ十度二十度聖母祭

献堂の壁の五月のカレンダー

身にぞ入む等身大のピエタかな

壁の余地クリスマスカード貼りつけて

一九八三年（昭和五十八年）八十四歳

第八句集『あなたこなた』刊行

うろつく灯止まれ最後晚餐図

パンちぎる聖木曜のわが一家

信濃人アダムイヴめき林檎摘む

われの血とかざしますミサ身にぞ入む

待降の木椅子に一書置き忘れ

一九八四年（昭和五十九年）八十五歳

聖母の名負ひて五月は来たりけり

黙想の時間は炉火も華やがず

ベツレヘムの星と思へば悴まず

聖厩や人形のごと神の子は

一九八五年（昭和六十年）八十六歳

十字切るや否やつんざく稲光

基督の釘抜けざりし野分かな

一九八六年（昭和六十一年）八十七歳

第九句集『除夜』刊行

淑気満つ大聖堂に椅子低く

氷柱立ち聖母マリアの孤なりけり

春服や禱りの言葉忘れをり

避暑ミサに行くべし霧の教会へ

避暑無聊ここにあるのは聖書のみ

トラピスト萩野芒野重ならず

ミサのベル霧すみやかにすみやかに

トラピスト小鳥湧く山四方にあり

咳く人のはたまた主禱とちりけり

一九八七年（昭和六十二年）八十八歳

切支丹墓地を埋めし落下褪す

紫の絵の具こぼしぬ四旬節

ピエタにも塵あり灰の水曜日

群れて来る肥満の羊イースター

カウベルは復活祭の楽のうち

復活の日を待ちたまふアイコンかな

中 島 賢 介

マリア座す燈火親しむ笠ひとり

女羊は乳房膨らしクリスマス

腕時計柱時計も聖夜告ぐ

一九八八年（昭和六十三年）八十九歳

天の虹仰ぎて右近ここにあり

エアメール其も吊らるる聖誕樹

聖菓ありコーヒーに糖入れずとも

一九八九年（昭和六十四年、平成元年）九十歳

日脚伸びゆくまま進む聖書かな

右近忌や丁髷のその^{ひととなり}為人

右近和服我ら洋服右近の忌

右近の忌城主たる位置慨きしと

まなざしを常に^{くもす}十字架へ右近の忌

信弱き我いかにせん右近の忌

薄板のサンタマリアを踏み汚し

踏絵あり埃の如く古りにけり

天主堂飛燕入るなの張り紙を

春天へ昇神の声まだ了らず

のどけしや降神の声長うして

聖壇も春の暮れゆく昼間に

一粒の麦と四文字や染卵

帰化神父五月の丘に昇天す

くりかへすハレルヤに風薫りけり

ミサの鈴寧けらく秋告げにけり

小鳥らが先んじて鳴くミサの鐘

度ましくピエタを掲ぐ壁炉かな

一九九〇年（平成二年）九十一歳

十露盤の如くに雪をのこす場所

容れ物が無い復活の不老水

夕焼に叫び走らん主いづこに

九十有二歳の吾も聖菓欲る

靴下がくの字に吊られクリスマス

何処の鐘聖夜聖刻告げゐるは

一九九一年（平成三年）九十二歳

春耕の力を謝して十字切る

聖堂はオレンジ色の春日満つ
難民のこぞるコーラン四旬節
信浅くともゆきわたる染玉子
滝打てりアダムはイブの手を引きて
十字切る別の我あり冬日射
クリスマスまで七面鳥は飽食す

一九九二年（平成四年）九十三歳

一本のペン持つ仕事四旬節
有難き旦の粥や四旬節

平畑静塔キリスト教俳句

一九三七年（昭和十二年）以前

なし

一九三七年（昭和十二年）三十二歳

霧の夜の伝道使徒に媚び招ばれ
戦火図も辻伝道も霧茫々
ネオンの朱聖鼓笛隊士の青面に

福音の畸異なるつどひ霧かくす

一九三八年（昭和十三年）三十三歳

病院船切支丹島望まるゝ

難民と神父とのみに居らしめよ

岳麓にクルスをひめし軍医の死

一九三九年（昭和十四年）三十四歳

なし

一九四七年（昭和二十二年）四十二歳

現代俳句収録作品

雪消光捕虜の裸身の十字架に来

一九四八年（昭和二十三年）四十三歳

懺悔せず修道院の樹をつかむ

電光の中の牛叫ぶ耶蘇名にて

わが下僕顔春の夜のエス祈る

磔像に大胸毛見せ春眠へ

とらびすと傘ばりばりと開けて出る

中 島 賢 介

天狼時代（昭和二十三年～昭和二十八年）四十三歳～四十八歳

『月下の俘虜』（昭和30年刊）所収

主ならねど癩と踊りて我汗す

加古川トラピスト

懺悔せず修道院の樹をつかむ

耕すがよし聖餐に腹円く

処女のみノミサに雲雀の上下音

トラピスト傘ばりばりと開き出づ

栗を黄に剥きしや罪を怖れぬ手

ゴルゴタの曇りの如し栗の花

洗礼や縮れて落ちる薔薇の弁

疎んぜられ悴まずしてピアノ弾く

白糖を嘗めクリスマス礼拝す

にこちんの君の五指にて梅を祈る

恋猫の地つゞきに聖書読むべきか

受洗未だ岩の裂け目に芽木繁る

泉鳴る修道院は眠るによし

頑として日焼けてミサの燭守る

筭を囲む聖母と腰曲げて

颱風に生木裂けしと布教僧

復活を半ばは信ず蠟立ち

寒玉子マリアと置かれ白さ増す

外套を山羊が銜へてクリスマス

聖堂の火気なく四隅力充つ

色足袋の足を忍ばせ加はるミサ

雪中や従きて神父の身に触る

雪はすべてわが洗礼に降りくるか

耶蘇名ルカ寒林響かせては名乗る

幾曲り咳も遠ぞくトラピスト

霜焼けの神父の双手かしこに在り

荒衣を脱げぬ神父や春の星

瞭かに春蚊聖なる者を去る

血のバラや数分前に懺悔すみ

草炎や妻に神父を慕はしめ

ぎすの声よく透るなり神父克つ

腰形尼服春空にて乾く

電光の中の牛呼ぶ耶蘇名にて

わが下僕顔春の夜の 에스 祈る

葡萄垂れさがる如くに教へたり

見つめる神ささやく悪魔薔薇享くる

善をなし帰る盛夏の切通し

長雨がノアの日の如児に降る

讃美歌を発す秋刀魚の煙中に

寒厨の濡手聖書に触れむとし

一汚点一黙示とも春蚊とぶ

春嵐に帽子ころびて聖母訪ふ

晩祷や岩も轡馬も冷えはじむ

いとけなく蝌蚪とミサとをゆきもどる

筭を聖母の木靴まさに踏む

颱風荒し聖晩餐図掲げてゐても

わが仔猫神父の黒き裾に乗る

むらさきの葡萄ふくめば慈悲兆す

バイブルに無き寒菊を父の供華

咳き入れる神父の形硝子ばり

寒雲雀声たらたらと聖家族

手さはりて砂の冬浜聖書よむ

大足の使途となるかな足袋を脱ぐ

雪片と耶蘇名ルカとを身に着けし

櫃を置く寒トラピストの大無言

乳房はなれて聖堂寒き床を這ふ

春山に滝一すぢや尼の熱

素手のまづしさ復活祭の卵つかむ

雪白や苗代つくる尼の手足

異信者が喉より枇杷の種を出す

神父の手肉色走り蠅はらふ

蠅螂が低きに攀ちて聖硝子

初霜越えて逃れにゆく祈りにゆく
岩ごろごろの寒の浄罪山に登る
肩胛を割つて聖母が枯木負ふ
胡桃割る聖書の万の字をとざし
ミサにゆく月日重ねて猫の恋
春蚊ある聖女の生ぶ毛近くして
一筋の春日も入れず懺悔聞く
雨の石道復活祭の裳映り
夕焼の中や聖書の反りもどる
聖書に咲く黄薔虚構ならず
ふくらはぎマリアに見せて脚気なり
天の川神父行く道畦となり
蟬声も肺活量も神のままに
聖樹置き大石館に狂ひ住む
恋猫の発する声をミサに容れ
老の鼻つつむ花びら復活祭
初蝶や鐘に溶けたる銀が鳴る
神父裾曳く熱砂触れてはすがりては
神父の汗どっと惜しげもなし場末
ミサ面紗きて朝顔の世が仄か

一九五四年（昭和二十九年）四十九歳

蛾の栞

イヴの燭黄色の皮膚つつしみて
聖樹下やうち伏し眠るものぐるひ
何の鞭西日の軒にトラピスト
十字架を立てし壁炉の熱浴びに

一九五五年（昭和三十年）五十歳

子の下宿

世のすみに焰の甘きクリスマス
蛇をのがれず復活祭の花抱へ
復活祭首筋くろきさいはひに
種播きし手をひろげたり林檎載す
母の日よ田の中で聞くささめ言
岩肌をつたふ滴り母祝ぐ日
尼の椅子かがやく足も涼むべし

キリストめく寒巖ばかり雀の歩
聖母の荷寒魚の黒き尾はみ出す
拳動かし背の子は寝ねず聖夜祈る
万凍るカトリック医師来るまでに
親しみ見る神父の足袋の裏汚れ
梅挿してマリアの白は奥深し
緑陰の地に濃く書いて知恵ざかり
鳩踏む地かたくすこやか聖五月
男ざかりの祈りや逃げる油虫
クローバーに素足沈めて青信者
見せられぬ聖狂女ありきりぎりす
壁穴のいとども加へ聖家族
蟻の浮足立てて革聖書
クリスマス更けてしたたか溝にほふ
青みどろ復活祭の日を籠めて
罪抱きて渦の芝火の中にあり
神父と立つ同じ大地の暖かさ
白露に田舎司祭の爪の垢
鉄のものの神父の蚊帳の裾押さへ

中 島 賢 介

深山に来て墓洗ふ涙もろ

墓洗ふパン持ち跳ねる幼なさと

くるひしの日焼天国垣間見には

一九五六年（昭和三十一年）五十一歳

鰻香

川に立ち復活祭の雨よぶ者

ぶらんこの春昇天す親不知

負ひ子云ふ神に裂かれし花火かと

修道尼汗噴きいでて枯淡なり

一九五七年（昭和三十二年）五十二歳

身の皮

こまぎれの住に天あり風一つ

梅の花死者の小罪口の端に

花野より天に四足を駆けし犬

紅葉敷く岩道火伏神のみち

一九五八年（昭和三十三年）五十三歳

雨粒小僧

鍬の柄に天地の春の顎あづけ

雨粒小僧復活祭の池にはね

鐘の紐蟻新生の地にとどく

胸に挿すバラ悪霊の心臓部

虹の環女神は石の脱衣して

地声にて聖母農園鳥威す

ふる雪や修尼看護の体あたり

大病の床に聖樹の明ながし

一九五九年（昭和三十四年）五十四歳

鴟の睦

白ジャケツ鶴の聖女の旅途中

修道の姉の足もと独楽廻す

天明や遭へば種まき修道女

赤土を足袋に復活祭のしるし

復活祭借りし木靴に足参る

藁塚の藁しべの唄クリスマス

一九六〇年（昭和三十五年）五十五歳

村一番

森の外根なし聖樹は立たされし

夜焚火のあぶれ者には神も失せ

一九六一年（昭和三十六年）五十六歳

旅鶴以降

なし

一九六二年（昭和三十七年）五十七歳

硬虹を建てし信濃に医学会

栃木集・諸国集

なし

一九六三年（昭和三十八年）五十八歳

なし

一九六四年（昭和三十九年）五十九歳

天高し聖開墾の岩のこり

綿虫といふ生を得て鐘がなる

雉を撃つ古き清教派に属し

鼻筋やべールを上げて菊に酔ふ

聖堂の床菊生けて花の畝

秋風や岩に置くべき聖歌集

一九六五年（昭和四〇年）六十歳

創世記厚くあるなり父の秋

一九六六年（昭和四十一年）六十一歳

わがクリスマスグラビアを焚けばすむ

一九六七年（昭和四十二年）六十二歳

なし

一九六八年（昭和四十三年）六十三歳

なし

一九六九年（昭和四十四年）六十四才

なし

一九七〇年（昭和四十五年）六十五歳

なし

青神代

なし

一九七一年（昭和四十六年）六十六歳

なし

壺国・筑波嶺

中 島 賢 介

なし

一九七二年（昭和四十七年）六十七才

万葉蕨

長崎詠草

墓通ひばかり長崎菊提げて

日に焼かれ生き残ること祈ること

召されしといふはりつけの足袋はだし

浦上や涙喜捨して泉湧く

海を踏む思ひ絵踏を終へにけむ

やや寒の踏絵に御一人のこる

秋の夜をマリア徳利と見てすごす

葡萄樹下失樂園の蛇の紐

一九七三年（昭和四十八年）六十八歳

花立番

ネロの座はなし蛇園の立見席

一九七四年（昭和四十九年）六十九歳

開花竹

なし

一九七五年（昭和五〇年）七十歳

アラスカ紀

なし

浪江の鮭

百合花粉まく復活のなき墓畔

一九七六年（昭和五十一年）七十一歳

秘所詣

なし

一九七七年（昭和五十二年）七十二歳

細道接穂

矢車を迎への天使止めたるか

一九七八年（昭和五十三年）七十三歳

カレワラ・スケッチ

出血のイエズス山小屋撰びの図

伴天連の墓とて濡るる露を待つ

一九七九年（昭和五十四年）七十四歳

和唐寺

ありありと天に帰りしサンタ星

吹抜の場に諸人の聖樹立つ

地に移し縦みこころの雪待たす

一九八〇年（昭和五十五年）七十五歳

枳餅づくし

復活祭牛は涎をともなひて

一九八一年（昭和五十六年）七十六歳

鈿女の世

なし

一九八二年（昭和五十七年）七十七歳

青飛鳥

聖樹こそ遠く惨なる定点に

大テント種切サンタへたりこむ

難民のツリーに林檎真紅なり

一九八三年（昭和五十八年）七十八歳

浪の花

なし

一九八四年（昭和五十九年）七十九歳

一縷

聖樹下に刈穂の稲を厚く敷く

精神科銘々皿に聖菓附く

聖誕を垣間見しより優し馬

蛇園の桃の実アダムならば挽ぐ

桔梗や隠れてこそそのマリア観音

観音のマリアも御子もじんべだけ

マリア観音枝として蛇守護の役

一九八五年（昭和六十年）八十歳

なし

一九八六年（昭和六十一年）八十一歳

待人のサンタは忘れものはせじ

昼間よりなどか聖樹はけばけばし

一九八七年（昭和六十二年）八十二歳

枕許サンタにB鉛筆ねがふ

一九八八年（昭和六十三年）八十三歳

なし

中 島 賢 介

一九八九年（平成元年）八十四歳

ありあまる日向をイヴにつづかしめ

一九九〇年（平成二年）八十五歳

なつかしの夕日を待てり大聖樹

抱かめと寄りそふ精神科の聖樹

素はだしの男聖樹に寄らむとす

表裏なくかがやく精神科の聖樹

立ち通す聖樹が精神科のすくひ

日が上るまで精神科の盲聖樹

精神科聖樹に語るにも独語

一九九一年（平成三年）八十六歳

寒すずめ少しかしまし聖誕祭

冬暖や耶蘇のキリストまつらるる

聖赤子しだれ桜にあやされて

縦の木に雪西暦の積まれゆく

狩人のサンタ袋に空にせず

冬の昼今をキリスト孤児ならず

聖誕祭乳房との縁絶たれても

蛇口にて復活祭の真水吸ふ

一九九二年（平成四年）八十七歳

なし

一九九三年（平成五年）八十八歳

なし

参考文献

『中村草田男全集』みすず書房 一九八四年（昭和五十九年）

『阿波野青畝全句集』花神社 一九九九年（平成十一年）

『平畑静塔全句集』沖積舎 一九九八年（平成十年）

新堀邦司著『神を讃う キリスト教俳句の世界』新教出版社 一九九九年（平成十一年）